

# は じ め に

学校長 角 本 順 次

昨年度は研究発表会を見送り、手書きの研究紀要第7集を出すにとどまったところから、今年度はぜひ研究発表会を開き、印刷した読みやすい紀要を出したいとの思いは強く、それだけに、いまようやくその実現をみたことは喜びにたえない。ここに掲げた研究主題「発達と障害に応じた教育をめざして — 個に視点をあてた指導の実践 —」は、すでに2年目を終わろうとしており、ここにその成果を世に問う時期が来たと実感している。

この研究主題に対するわれわれの方法は、各教員が一人の児童・生徒を選び、そのもっとも必要とする教育的課題にとり組むという、いわば事例研究的な形のものであるが、今年度の人事異動が本校では比較的規模の大きなものであったために、前年度の研究レベルをいっそう高いものに引き上げるという点で、不十分なものになったことを認めざるを得ない。しかしながら、その点はとも角、こうした事例研究的方法のモデルとして、われわれの念頭にあったのは、障害や問題行動をもつ子供を扱う専門機関が行う臨床的・治療的アプローチではなく、アメリカのIEP (Individual Education Program) のような、教育活動全体の中にそれらをも包みこんだアプローチであった。もとより、学校という場では、治療機関と異なり、専門的なスタッフにも恵まれず、診断のための高度の技法が駆使されるわけではないから、そこに限界もあるわけだが、反面、入学時から長期にわたって観察・指導がなされており、保護者との連携もきわめて密接である。特に養護学校では、一般の小中学校、高等学校にくらべても、これらの利点は大きい。それに何よりも、授業を中心としたあらゆる教育活動の中で、課題にとり組むことができる。これらの条件を十分に生かした指導がなされたかとなると、点検のの余地があるにせよ、事例に即したとり組みを学校教育の中で行うには、こうした考え方が基本になるものと思われる。

実は、本校と同じ内容の研究主題を掲げた学校は他にも少なからずあり、これらに混じって、あるいはおくれて、出来ばえを公にすることについて、校内にはためらいもあった。それをあえてしたのは、堂々と胸を張って自信作を披露するのではなく、われわれが精一杯なし得たものを、とも角も批判にさらすことで、いっそうの向上を得ようとする決心に立ち至ったからにはほかならない。率直なご意見・ご指導を願ってやまない。